国　語　問　題

注 意 事 項

1．試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。

2．この問題冊子は 21 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。

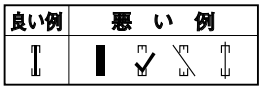
3．問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙（マークシート）の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。

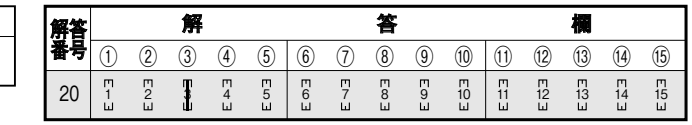
4．解答は必ず国語解答用紙（マークシート）の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。

5．マーク解答欄記入上の注意

⑴　解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、 **20** と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20** の**解答欄**の③にマークしてください。

例





⑵　複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。

⑶　解答用紙へのマークはすべてＨＢのシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

⑷　解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。

⑸　解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。

6．国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。

7．試験時間中に退場することはできません。

8．問題冊子は必ず持ち帰ってください。

9．解答用紙は持ち帰ってはいけません。

Ⅰ　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

今でこそ、当たり前になっているが、明治になって日本に輸入された様々な概念の中でも、「個人 individual」(1)というのは、最初、特によくわからないものだった。その理由は、日本が近代化に遅れていたから、というより、この概念の発想自体が、西洋文化に独特のものだったからである。非常に込み入った話なので、ここでは二つのことだけを押さえておいてもらいたい。

一つは、一神教であるキリスト教の信仰である。「誰も、二人の主人に仕えることは出来ない」というのがイエスの教えだった。人間には、幾つもの顔があってはならない。常にただ一つの「本当の自分」で、一なる神を信仰していなければならない。だからこそ、元々は「分けられない」という意味しかなかったindividualという言葉に、「個人」という意味が生じることとなる。

もう一つは、論理学である。椅子と机があるのを思い浮かべてもらいたい。それらは、それぞれ椅子と机とに分けられる。しかし、机は机で、もうそれ以上は分けられず、椅子は椅子で分けられない。つまり、この分けられない最小単位こそが「個体」だというのが、分析好きな西洋人の基本的な考え方である。

動物というカテゴリーが、更に小さく哺乳類に分けられ、ヒトに分けられ、人種に分けられ、男女に分けられ、一人一人にまで分けられる。もうこれ以上は分けようがない、一個の肉体を備えた存在が、「個体」としての人間、つまりは「個人」だ。国家があり、都市があり、何丁目何番地の家族があり、親があり、子があり、もうそれ以上細かくは分けようがないのが、あなたという「個人」である。

逆に考えるなら、個人というものを束ねていった先に、組織があり、社会がある。こうした思考法に、日本人は結局、どれくらい馴染(なじ)んだのだろうか？

「個人」という概念は、何か大きな存在との関係を、(ア)タイチして大摑(づか)みに捉える際には、確かに有意義だった。――社会に対して個人、つまり、国家と国民、会社と一社員、クラスと一生徒、……といった具合に。

A、私たちの日常の対人関係を(イ)チミツに見るならば、この「分けられない」、(a)首尾一貫した(2)「本当の自分」という概念は、あまりに大雑把で、硬直的で、実感から乖離(かい)している。

信仰の有無は別としても、私たちが、日常生活で向き合っているのは、一なる神ではなく、多種多様な人々である。

国語

また、社会と個人との関係を、どれほど頭の中でチュウショウ(ウ)的に描いてみても、朝起きて寝るまでに現実に接するのは、会社の上司や同僚、恋人やコンビニの店員など、やはり具体的な、多種多様な人々である。とりわけ、ネット時代となり、狭いキンシツ(エ)な共同体の範囲を超えて、背景を異にする色々な人との交流が盛んになると、彼らを十把一絡げ(b)に「社会」と括ってみてもほとんど意味がない。

私たちは、自分の個性が尊重されたいのと同じように、他者の個性も尊重しなければならない。繰り返しになるが、相手が誰であろうと、「これがありのままの私、本当の私だから！」とゴリ押ししようとすれば、ウンザリされることは目に見えている。私たちは、極自然に、相手の個性との間に調和を見出そうとし、コミュニケーション可能な人格をその都度生じさせ、その人格を現に生きている。それは厳然たる事実だ。なぜなら、コミュニケーションが成立すると、単純にうれしいからである。

その複数の人格のそれぞれで、本音を語り合い、相手の言動に心を動かされ、考え込んだり、人生を変える決断を下したりしている。 B 、それら複数の人格は、すべて「本当の自分」である。

にも拘らず、選挙の投票（一人一票）だとか、教室での出席番号（まさしく「分けられない」整数）だとか、私たちの生活には、一なる「個人」として扱われる局面が依然として存在している。そして、自我だとか、「本当の自分」といった固定観念も染みついている。そこで、日常生きている複数の人格とは別に、どこかに中心となる「自我」が存在しているかのように考える。あるいは、結局、それらの複数の人格は表面的な「キャラ」や「仮面」に過ぎず、「本当の自分」は、その奥に存在しているのだと理解しようとする。

この矛盾のために、私たちは思い悩み、苦しんできた。

ならば、どうすればよいのか。

「自我を捨てなさい」とか「無私(c)になりなさい」とかいったことは、人生相談などでも、よく耳にする。しかし、そんな悟り澄ましたようなことを聞かされても、じゃあ、どうやって生きていけばいいのかは、わからない。自分という人間は、現に存在している。この「私」は、一体、どうなるのか？　無欲になりなさい、という意味だとするなら、出家でもするしかない。

私たちには、生きていく上での足場が必要である。その足場を、対人関係の中で、現に生じている複数の人格に置いてみよう。その中心には自我や「本当の自分」は存在していない。ただ、人格同士がリンクされ、ネットワーク化されているだけである。

不可分と思われている「個人」を分けて、その下に更に小さな単位を考える。そのために、本書では、「分人」（dividual）という造語を導入し

国語

た。「分けられる」という意味だ。

C、自我を否定して、そんな複数の人格だけで、どうやって生きていけるのか？

尤もな疑問である。そこで、ここからは、どうすればそれが可能なのかを、順を追って丁寧に見ていきたい。

まず、イメージをつかんでもらいたい。

一人の人間の中には、複数の分人が存在している。両親との分人、恋人との分人、親友との分人、職場での分人、……あなたという人間は、これらの分人の集合体である。

個人を整数の1だとすると、分人は分数だ。人によって対人関係の数はちがうので、分母は様々である。そして、ここが重要なのだが、相手との関係によって分子も変わってくる。

関係の深い相手との分人は大きく、関係の浅い相手との分人は小さい。すべての分人を足すと1になる、と、ひとまずは考えてもらいたい。

(3) 分人のネットワークには、中心が存在しない。なぜか？　分人は、自分で勝手に生み出す人格ではなく、常に、環境や対人関係の中で形成されるからだ。私たちの生きている世界に、唯一絶対の場所がないように、分人も、一人一人の人間が独自の構成比率で抱えている。そして、そのスイッチングは、中心の司令塔が意識的に行っているのではなく、相手次第でオートマチックになされている。街中で、友達にバッタリ出会して、「おお！」と声を上げる時、私たちは、無意識にその人との分人になる。「本当の自分」が、慌てて意識的に、仮面をかぶったり、キャラを演じたりするわけではない。感情を隅々までコントロールすることなど不可能である。

(4) 分人をベースに自分を考えるということと、単に「自我を捨てる」ということとはどこが違うのか？

私たちは、生きていく上で、継続性をもって特定の人と関わっていかなければならない。

そのためには、誰かと会う度に、まったく新しい自分であることはできない。出社する度に、自己紹介から始めて、一から関係を結び直すという、バカげた話はない。

私たちは、朝、日が昇って、夕方、日が沈む、という反復的なサイクルを生きながら、身の回りの他者とも、反復的なコミュニケーションを重ねている。

人格とは、その反復を通じて形成される一種のパターンである。

国語

この人とは、こういう態度で、こういう喋(しゃべ)り方をすると、コミュニケーションが成功する。それに付随して、喜怒哀楽様々な感情が自分の中で湧き起こる。会う回数が増えれば増えるほど、パターンの精度は上がってゆく。また、親密さが増せば増すほど、パターンはより複雑なコミュニケーションにも対応可能な広がりを持つ。それが、関係する人間の数だけ、分人として備わっているのが人間である。

また、他者とは必ずしも生身の人間でなくてもかまわない。ネット上でのみ交流する相手でもかまわないし、自分の大好きな文学・音楽・絵画でもかまわない。あるいは、ペットの犬や猫でも、私たちは、コミュニケーションのための一つの分人を所有しうるのだ。

（平野啓一郎『私とは何か　「個人」から「分人」へ』より。出題にあたって本文を一部改変した）

国語

問一　傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならい、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 1　(イ) 2　(ウ) 3　(エ) 4

(解答例) コウケン

① 高　② 貢　③ 工　④ 功　⑤ 幸　⑥ 献　⑦ 権　⑧ 堅　⑨ 謙　⑩ 件

答 ② ⑥

(ア) タイチ

① 帯　② 体　③ 対　④ 態　⑤ 耐　⑥ 値　⑦ 置　⑧ 地　⑨ 知　⑩ 治

(イ) チミツ

① 千　② 致　③ 知　④ 智　⑤ 緻　⑥ 満　⑦ 蜜　⑧ 三　⑨ 充　⑩ 密

(ウ) チュウショウ

① 柱　② 宙　③ 中　④ 抽　⑤ 駐　⑥ 象　⑦ 像　⑧ 傷　⑨ 省　⑩ 章

(エ) キンシツ

① 均　② 近　③ 禁　④ 金　⑤ 菌　⑥ 執　⑦ 室　⑧ 失　⑨ 質　⑩ 湿

国語

問二　傍線部(a)・(b)・(c)の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)　5

(b)　6

(c)　7

(a)　首尾一貫

① 物事の始めと終わり
② 結果が予想通りになること
③ 始めから終わりまで矛盾がないこと
④ 前提と結論が両方とも適切なこと

(b)　十把一絡げ

① 十種類のものを一つに混ぜること
② 区別せず一つにまとめること
③ 多くのものを十束ごとに数えること
④ 立場が異なる人々を巻き込むこと

(c)　無私

① 私利私欲が無い状態
② 自分より他人に尽くす状態
③ 自分は存在しないと仮定した状態
④ 個人の財産所有を否定した状態

国語

問三　空欄 A ・ B ・ C に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 8

① A　したがって　B　だが　C　それゆえに
② A　そのため　B　すなわち　C　むしろ
③ A　しかし　B　あるいは　C　だが
④ A　ところが　B　つまり　C　しかし

問四　傍線部(1)「「個人 individual」というのは、最初、特によくわからないものだった」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 9

① 日本は近代化で西洋に遅れていたため、個人という概念を自力で発明して普及させなければならなかったから
② 神に自分を偽ってはならないという信仰や、世界を要素に分割し分析するという論理学の思考法が日本にはなかったから
③ 一神教が基本の西洋と違い、多神教が基本の日本では、宗教の学問化や論理学の発展が遅れていたから
④ 多神教が基本の日本では、人々が向き合うのは一なる神ではなく、神や動物も含めた多種多様な存在だと考えられてきたから

国語

問五　傍線部(2)「「本当の自分」という概念は、あまりに大雑把で、硬直的で、実感から乖離している」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 10

① 我々が日常的に接するのは多種多様な人々であり、相手の個性を尊重して柔軟に折り合いをつけているから
② 自分の個性を他人に尊重してもらうには、他人の個性も尊重しなければならないという互恵性があるから
③ 一神教の影響が強かった時代と違い、現代では「本当の自分」よりも、他人が受け入れ可能な個性のほうが重視されるから
④ 背景を異にする色々な人との交流が盛んになると、彼らをひとことで「社会」と括ってみてもほとんど意味がないから

問六　傍線部(3)「分人のネットワークには、中心が存在しない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 11

① 分人は、自分で勝手に生み出す人格ではなく、伝統や親子関係によって規定され、与えられるものであるということ
② 自我や「本当の自分」が存在すると思うのは幻想で、実際にはコミュニケーションが成立するたびに分人が生まれるということ
③ 構成比率が異なるそれぞれの分人のうち、比率の高い分人が「本当の自分」として中心的役割を果たすようになるということ
④ 「本当の自分」というものはなく、社会的場面に応じて分人を半ば自動的に切り替えているということ

国語

問七　傍線部(4)「分人をベースに自分を考えるということと、単に「自我を捨てる」ということとはどこが違うのか？」とあるが、二つの考え方における「自我」の捉え方にはどのような違いがあるのか。国語記述解答用紙に、四十字以上六十字以内（句読点を含む）で記述しなさい。

（この枠は下書き用です。別紙の国語記述解答用紙に記入のこと。）

国語

Ⅱ　次の文章は、山川方夫「最初の秋」の一部である。よく読んで後の設問に答えなさい。

「そろそろ起きてくれよ、腹がへってるんだ」

「……うるさいなあ、もうすこし待ってよ。……なんなら、自分でつくって食べてよ、冷蔵庫の中に……」

いいかけて、どうやら妻はまた睡ってしまっている。まったく、この寝起きの悪さには往生する。はじめての喧嘩も、こんなことからだったな、と私は思う。

当世ふうの考えでは、私は「古い男」の一人だ。妻にいわれるまでもなく、これは明瞭だ。「古い男」の欠点は、自分のいうことはべつに間違っていないと確信していることで、私は、仕事をしている亭主が食事をつくるなんて、結婚生活の大切な意味の一つが欠けることだ、と信じている。それは、妻である自覚の欠如か、妻の怠慢の一つにすぎない。

（中略）

――たしかに、私は「古い男」だと思う。突然、陽光の中で、私は笑いだした。自分がもう若くも、新しくもないということ、それを素直に承認できる自分が、ひどく嬉しかった。私は年寄りではない。が、けっしてもはや若くはない。新しい人間たちの仲間なんかではない。私は、青春なんていう不潔でただムソウ(ア)的にさえ見えるほど計算高く臆病な季節なんかにはいない。

私は、昔から若い人間、新しい人間たちが大嫌いだった。自分がそう見られることに生理的な反撥とケンオ(イ)とを感じていた。若者は甘やかされ、同情されることしか望んではいない。無考えで、ケイハク(ウ)で、いい気で、そのくせ臆病で、センチメンタルで、おまけに自分しか愛してはいない。そんな自分への自己憐憫(a)が大好きときている。そんな人間を、誰が好きになれるか。ゆるしてやれるものか。大人がまともに相手にしてやれるか。――かれらの生きているのは、じつは権力へのあこがれであり、しかもかれらは自分をなんの責任もない存在、誰かに責任を肩代りしてもらった存在のままにしておきたい。かれらの孤独、かれらの逃亡癖（それは冒険心と呼ばれたりもするが）、かれらの感傷やヒステリックな無力感は、なんの力もない自分と、権力への恣欲との間で、両方を捨てきれないジレンマのあらわれなのにすぎない。青春。私には、その内部は醜い。

もちろん、私の嫌うのは、私自身の若さでしかなかろう。私は、たしかにすこし異常なほど、(1)家族たちからのヘソの緒を切断できなかった。うまく処理できなかった、といってもいい。いまだに、いや、これからも私はそのことにきっと拙劣だろう。肉親はいやでも私の内部に侵入し、

国語

谺し、場所を占めてしまう。私にはそれが苦しく負担でしかなく、だからこそ私は、ほんの少しの自分も誰にもあたえず、誰からも侵入されないで生きるのを空想していたのだ。きっと私は、頭の先から爪先まで、ぜんぶ私だけで引き受け、私だけで塡めてしまうことを、まるで人間たちの間での理想のルールのようにムソウし、それに固執したりしたのだ。

そうなのだ、と縁側に腰を下ろし、また脚にじゃれかかる犬の頭を撫でて私は思う。だからこそ、私にとり、自分がつねに孤独であることが正義だった。いや、自分が「自分」であることを守りながら生きるための、ただ一つの方法だった。私には「愛」は負担か拘束である以外のなにものでもなかったのだ。だから私は「愛」をおそれ、平然と私に癒着してくる他人たち、ことに女たちをおそれた。私は、何人かの女たちから、ただそこに「愛」の気配が生まれただけのために逃れた。私は臆病な、(b)内弁慶の子供だった。近づいてこない他人たちにはやさしく、近づいてくる他人たちには、ただかれらが近づいてくるからというその理由だけで、どんな残酷な方法をとっても逃れた。……

なにもかも、私が先天的に、生まれたときからあたえられていた巣に固執し、そこにしか生きる場所はないと思うほど固執し、自分で新しく巣をつくる努力を忘れていたことのせいだ。——そうだ、これが私の若さだった、と思う。私が嫌い、憎み、屈辱を感じつづけ、どうしても信頼したり誇りにもできなかった、これが私の若さなのだ。そこに、どんな立派な新しさなんか、予想できるものか。あったのは、要するにごく個人的な幼さにすぎなかった。私が、若い人間、新しい人間と見られることを生理的に恥じ、ケンオし、あらゆる「若い人間」とか「新しい人間」とかいう言葉に不信しかもてなかったわけは、おそらくそんなところだろう。

でも、いま、私はその大嫌いだった若さから、ようやく足を抜きはじめているのを感じる。それが嬉しい。そうなのだ、誰が三十四歳の既婚の男を、若いとか、新しい人間だとか呼べるだろう！

私は、もう一度声をあげて笑う、大きく全身を(エ)クッションさせ、家の中に入る。本当に、たまらなく腹がへってきているのだ。

だが、妻はやっと起きたようだ。しばらく眩しい日光の中にいたせいか、目に紫いろの暈がかかっている。その中で、台所で動いている妻の姿が見える。彼女は、ガウンの上にエプロンを結んでいる。

茶箪笥から皿を取りにきた妻が、新聞に目を落としている私に声をかける。

「どう？　幸福な日？」

「うん、(2)幸福な日だ」

と、同じ上機嫌なときの合言葉で、私も答える。……とにかく、私は一本の道を歩いてきた。そして、いま、やっとここにいるのだ。

「あら。なによ、畳が砂だらけよ。ちゃんと足は拭(ふ)いたの？　犬と遊んでたんじゃなかった？　手は洗った？」

仕方なく、私は洗面所に歩く。ついでに顔も洗う。

巣というやつは、はじめからあたえられた安息の場所であるわけはないのだ、と私は思う。いわばそこは、見えない行司のいる土俵だ。私たちはそこで勝ったり負けたり、両方とも負けたり、両方とも勝ったりする。甘えたり甘えられたり、怒っては怒られたりダマされたり、おたがいにうまくダマせないのに腹を立てたりする。でも、これは大仕事だ。

だから私たちは、たいてい疲れはてて睡る。そして、(3)しだいにその手ごたえが、自分自身の一部になり相手の一部になることを願っている。

「……ねえ、十月七日の午前九時四十六分よ、おぼえといて」

無花果(いちじく)を食べながら、妻がいう。

「なんだいそれ」

「聖火がこの町を通るんだって。ね、見に行かない？　国道まで」

「……行くとするか。せめて、そのくらいはオリンピック[*1]につきあってやるべえ」

二宮[*2]の言葉で、私はいう。私は、オムライスを口に運んでいる。

ふと、視線が感じられる。妻が私をみつめている。『鉄腕アトム』[*3]に気がついたか、と私はおびえてその表情をうかがったが、どうやら、そうでもない。

「……ねえ」

と、妻がいう。

「なんだか、へんな気がしない？　しばらく前まで知らなかった私たちが……」

「うん……」

国語

と、私はいう。この質問は、ここしばらくなかった。そして、私はこの手の質問には、なんと答えたらいいのか、いつもわからなくなる。

「はじめてこの家で二人きりになった晩、……」と、妻はいった。「私、あなた誰？　っていっちゃったわね」

「そう、あのときはびっくりしちゃった。こわくなっちゃったよ、おれ」と、私は口をもぐもぐさせながら答える。「とたんに、ぼくにも君が、見も知らぬ女の人に見えてね、いったいおれ、おれはなんなんだろう、って思った」

「君は誰？　あなたもそういったわ。私、急にこわくなって泣いちゃったわ」

「いくらながくつきあっていたって、そういうことはあるだろうな。……たとえば、一人娘を嫁にやってしまった老夫婦が、その晩、ふっと顔を見合わせて、いっしょに、いったい、この人って、私にとってなんなのだろう、あなたは誰？　って思うとかな」

「へんな想像。……でも、(4)案外ありそうだって思うわ」

「あるだろうね、おれたちにも」

答えながら、私は食事を終える。ぼんやりと陽光に眩しく照る庭の緑を見る。海の音が不意に大きく耳に聞こえ、さわやかに初秋の潮風が頬にあたる。

「いいお天気。今日は私、お庭にお蒲団を干すわ」

と、妻が張り切った声音でいう。

ふとそれを聞きながして、(5)私は、――あなたは誰？　と、そっと自分に聞く。

（出題にあたって本文を一部改変した）

＊注１　オリンピック　昭和三十九年（一九六四年）の東京オリンピックのこと。

２　二宮の言葉　ここでは、前述の「やるべえ」の例にみられるべえべえ言葉といわれる神奈川の方言のこと。

３　鉄腕アトム　手塚治虫原作のＳＦ漫画。「私」は、妻の許可を得ずに本屋でこの漫画の最新号を購入していた。

問一　傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならい、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 12　(イ) 13　(ウ) 14　(エ) 15

(解答例)　コウケン

① 高　② 貢　③ 工　④ 功　⑤ 幸　⑥ 献　⑦ 権　⑧ 堅　⑨ 謙　⑩ 件

答　②　⑥

(ア) ムソウ

① 武　② 無　③ 矛　④ 夢　⑤ 霧　⑥ 想　⑦ 創　⑧ 双　⑨ 相　⑩ 窓

(イ) ケンオ

① 険　② 嫌　③ 剣　④ 堅　⑤ 県　⑥ 男　⑦ 汚　⑧ 雄　⑨ 尾　⑩ 悪

(ウ) ケイハク

① 警　② 敬　③ 計　④ 啓　⑤ 軽　⑥ 博　⑦ 薄　⑧ 白　⑨ 泊　⑩ 拍

(エ) クッシン

① 靴　② 掘　③ 堀　④ 屈　⑤ 履　⑥ 心　⑦ 新　⑧ 信　⑨ 伸　⑩ 申

国語

問二　傍線部(a)・(b)の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)　自己憐憫

① 自分の優れた資質に満足すること
② 自分自身を賞賛し、褒めたたえること
③ 自分自身を忌み嫌うこと
④ 自分を哀れんでかわいそうだと思うこと

(b)　内弁慶

① 家族を守ろうとするが故に、他人に対して攻撃的な性格のこと
② 家族には心を許しているが、他人に対して警戒心が強いこと
③ 家の外ではいくじがないが、家族にはいばっていること
④ 他人に対しては威勢がいいが、実は内省的な性格のこと

(a) 16

(b) 17

国語

問三　傍線部(1)「家族たちからのヘソの緒を切断できなかった」とあるが、それはどのようなことを意味しているのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 18

① 家族からの干渉に嫌気を覚えながらも、自分の未熟さ故に彼らを拒絶することができなかった。
② 家族と共に日常生活を送るなかで、自分だけの自由な時間を確保することができなかった。
③ 家族から加えられる厳しい意見に対して、年少者であるために徹底的に論破することができなかった。
④ 常に家族から虐げられていたにもかかわらず、家族であるが故の愛情があるために憎むことができなかった。

問四　傍線部(2)「幸福な日だ」とあるが、「私」がそのように答えたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 19

① 「私」が、自分の家族との縁を切って、新しい土地で妻との生活を始めることができたから
② 妻が、自らの役割を自覚して、自分が期待していたように朝食を用意してくれたから
③ 「私」が、自分が「古い男」であり、もはや「若い人間」ではないことを認識できたから
④ 「私」が、貧しい生活から抜け出して、人並みに所帯を持つことができるようになったから

国語

問五　傍線部(3)「しだいにその手ごたえが、自分自身の一部になり相手の一部になること」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 20

① 生活を共にしていくなかで、お互いに相手の考えていることがわかるようになること
② 日々の生活の中で率直に意見を言い合うことを通じて、お互いに同じ考え方をもつようになること
③ 生活の中でぶつかり合った日々が、長い月日を経ると自分や相手にとって良い思い出となること
④ 日々の喧嘩や小言に慣れてしまい、お互いに大きなストレスを感じずに一緒にいられるようになること

問六　傍線部(4)「案外ありそうだって思うわ」とあるが、妻がそのように答えたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 21

① 長い年月を経ることにより、過去の記憶があいまいになることもあると思ったから
② 長い年月を経たとしても、お互いの存在の意味がわからなくなることもあると思ったから
③ 「私」と妻は、過去に自分が誰であり、なぜこの場所にいるのかわからなくなったことがあったから
④ 長い人生の中でお互いの態度に不信感を抱き、すれ違うこともあると思ったから

国語

問七　傍線部⑸「私は、――あなたは誰？　と、そっと自分に聞く」とあるが、「私」が自分にこのような問いかけをしたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 22

① 「私」は、妻との新たな生活を始めても、今後の自分の生き方がわからないから
② 「私」は、生活を共にしている妻に対してさえ根強い不信感をぬぐい去ることができないから
③ 「私」は、未だに自分が「若い人間」ではなくなったという事実を受け入れることができないから
④ 「私」は、結婚して夫となったことが正しい選択だったということに自信を持つことができないから

問八　本文の内容と一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。 23

① 「私」と妻は、今までと同様、今後もお互いの関係を再確認する機会があるだろうと考えている。
② 「私」は、妻との新しい生活を通じて、過去の家族とのわだかまりを乗り越えようとしている。
③ 私自身の「若さ」とは、自分らしさを完全に貫くために他者と愛情を分かち合うことを拒絶していたことである。
④ 「私」は、日常生活における衝突を通じて、妻がかけがえのない存在になることを願っている。
⑤ 「私」は、妻との生活を始めた後も、自分と周囲の人との関係に悩むことがあった。
⑥ 「私」は、「新しい人間」特有の屈折した思いや未熟さを暖かく見守ることができなかった。

国語

Ⅲ　以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一　次の(1)～(3)に示した熟語の対義語を完成するために、解答例にならい、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例)　義務 ↔ □□

① 自　② 心　③ 権　④ 益　⑤ 風　⑥ 利　⑦ 確　⑧ 和

(1)　排除 ↔ □□

① 方　② 報　③ 包　④ 砲　⑤ 摂　⑥ 説　⑦ 節　⑧ 切

(2)　濃厚 ↔ □□

① 淡　② 短　③ 単　④ 丹　⑤ 拍　⑥ 伯　⑦ 博　⑧ 白

(3)　収縮 ↔ □□

① 某　② 膨　③ 棒　④ 帽　⑤ 長　⑥ 超　⑦ 張　⑧ 調

(1) 24　(2) 25　(3) 26

答　③　⑥

国語

問二　次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)　27

(1)　針小□大

①　坊　②　某　③　棒　④　防　⑤　望

(2)　28

(2)　博覧□記

①　強　②　教　③　経　④　興　⑤　狂

(3)　29

(3)　質実□健

①　強　②　豪　③　号　④　業　⑤　剛

問三　次の(1)・(2)の文の傍線部の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)　30

(1)　あたかも自分の手柄のように語る。

①　平然と　②　まるで　③　すばやく　④　そっくりに

(2)　31

国語

(2) 今度の試験はおしなべて出来がいい。

① おしはかると
② ほんの少しだけ
③ かなり
④ すべて一様に

問四 次の(1)・(2)の故事成語の説明として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 32

(2) 33

(1) 春秋に富む

① 経験が豊富で熟達していること
② 深い味わいのある人柄のこと
③ 春から秋にかけて豊かな季節であること
④ 年が若くてまだ将来があること

(2) 李下に冠を正さず

① 人から疑いをかけられるような行動は避けるべきであること
② 常日頃、正しい服装を心がけること
③ 人に迷惑をかけない行いをすればおのずと道は開けること
④ 人の言葉を無下にしないこと

国語